

再び放射能を南相馬にまき散らす 蕨平「資材化」施設の危険性



市民放射能監視センター(ちくりん舎) 青木一政
たまあじさいの会 中西四七生

「後だしじゃんけん」は許される？

	福島原発事故前	福島原発事故後
公衆の被ばく上限	1ミリシーベルト/年間	20ミリシーベルト/年間
放射性廃棄物の基準	100ベクレル/Kg以上	8000ベクレル/Kg以上
体表面汚染のスクリーニング・レベル	13,000cpm	100,000cpm
労働者の緊急作業時被ばく限度	100ミリシーベルト	250ミリシーベルト
被ばく管理の考え方	空間線量率 	個人被ばく線量 

20倍

80倍

8倍

2.5倍

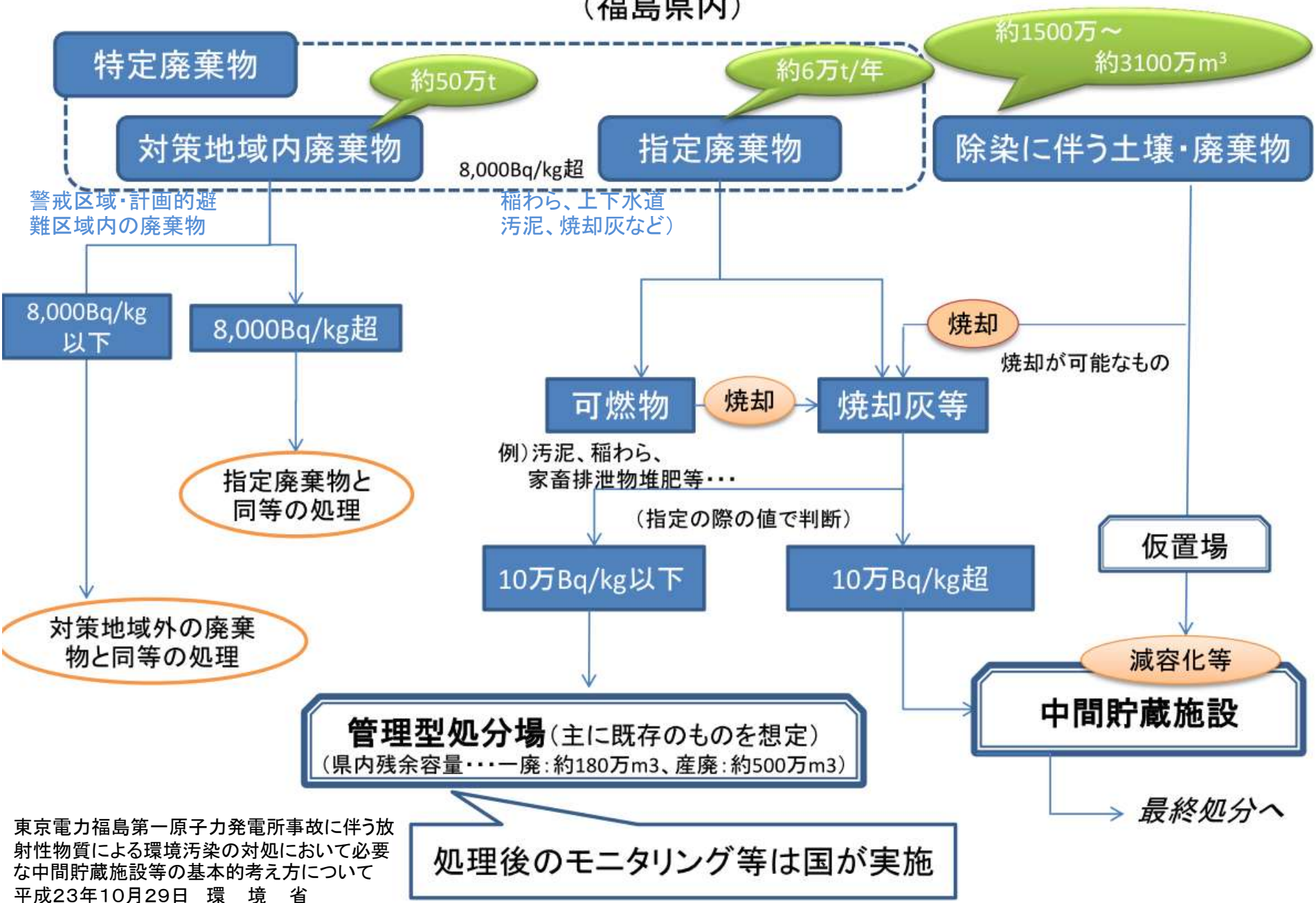
4～10倍
くらい？

究極の後だしジャンケン 行き場のない除染ゴミを「資源」としてばら撒く！



図2

特定廃棄物及び除染に伴う廃棄物の処理フロー (福島県内)



復興予算は誰のもの？

フクシマ 仮設焼却炉 建設ラッシュ

フクシマの避難指示区域を中心に仮設焼却炉が建設ラッシュを迎えています。世界で初めての試みであり、巨額の国費が使われますが、これらはどの程度報道されているのでしょうか？

これだけの焼却炉で一斉に高濃度の汚染廃棄物を燃やせば、排ガスとともに放射性物質を含む微粒子は全国に散らばります。

微粒子とは、ばいじんまたは飛灰と言われる焼却灰で、その多くは10マイクロメートル以下の肉眼で見えない大きさです。重量で全体の40%を占めるとされ、大きさは1マイクロメートル以下のものまで様々です。(1マイクロメートルは0.001ミリメートル、1000ナノメートル)※

30マイクロメートルの大きさのスギ花粉は、都道府県境をまたぎ、はるか遠くへ飛散することは知られています。それよりさらに小さな粒径の焼却灰は当然飛距離も長くなると考えられます。※

 稼働中
  建設中
  計画中心

※たまあじさいの会HP参照：<http://www.011.upp.so-net.ne.jp/tamaaji/mechanism.html>



福島市:60億円超



伊達市:180億円超



相馬市:73億円超



高尾村:344億円超



飯館村:39億円超



郡山市:115億円超



富岡町:600億円超



鮫川村:7億円超



川内村:29億円超



広野町:90億円超

19市町村推定24基実質稼働日数わずか4ヶ月～4年

2014.12月現在 金額は解体費用を含まないものあり



放射能ゴミ焼却を考えるふくしま連絡会

焼却しても14～22%程度しか減らない = 土壌・瓦礫は燃えない！

表 1 除染計画区域からの除去土壌等の推計発生量（福島県内）

	直轄（万 m ³ ）		市町村（万 m ³ ）		合計（万 m ³ ）	
	土壌等	可燃物	土壌等	可燃物	土壌等	可燃物
●原発生量						
住居・施設等	69～98	24～33	728～800	14	797～898	38～47
田	336～504	57～76	150～154	24～25	628～872	130～173
畑	124～186	23～30				
牧草地・果樹園等	18～28	26～42				
森林（生活圏）	49～196	157～544	（住居・施設等を含む）		49～196	157～544
その他	34～49	1	28	9	62～77	10
小計	629～1,061	287～725	906～982	47～48	1,535～2,043	334～773
合計	917～1,786		953～1,029		1,870～2,815	
●減容化後発生量（可燃物の 20%になると仮定）						
小計	629～1,061	57～145	906～982	9～10	1,535～2,043	67～155
合計	686～1,206		915～991		1,601～2,197	

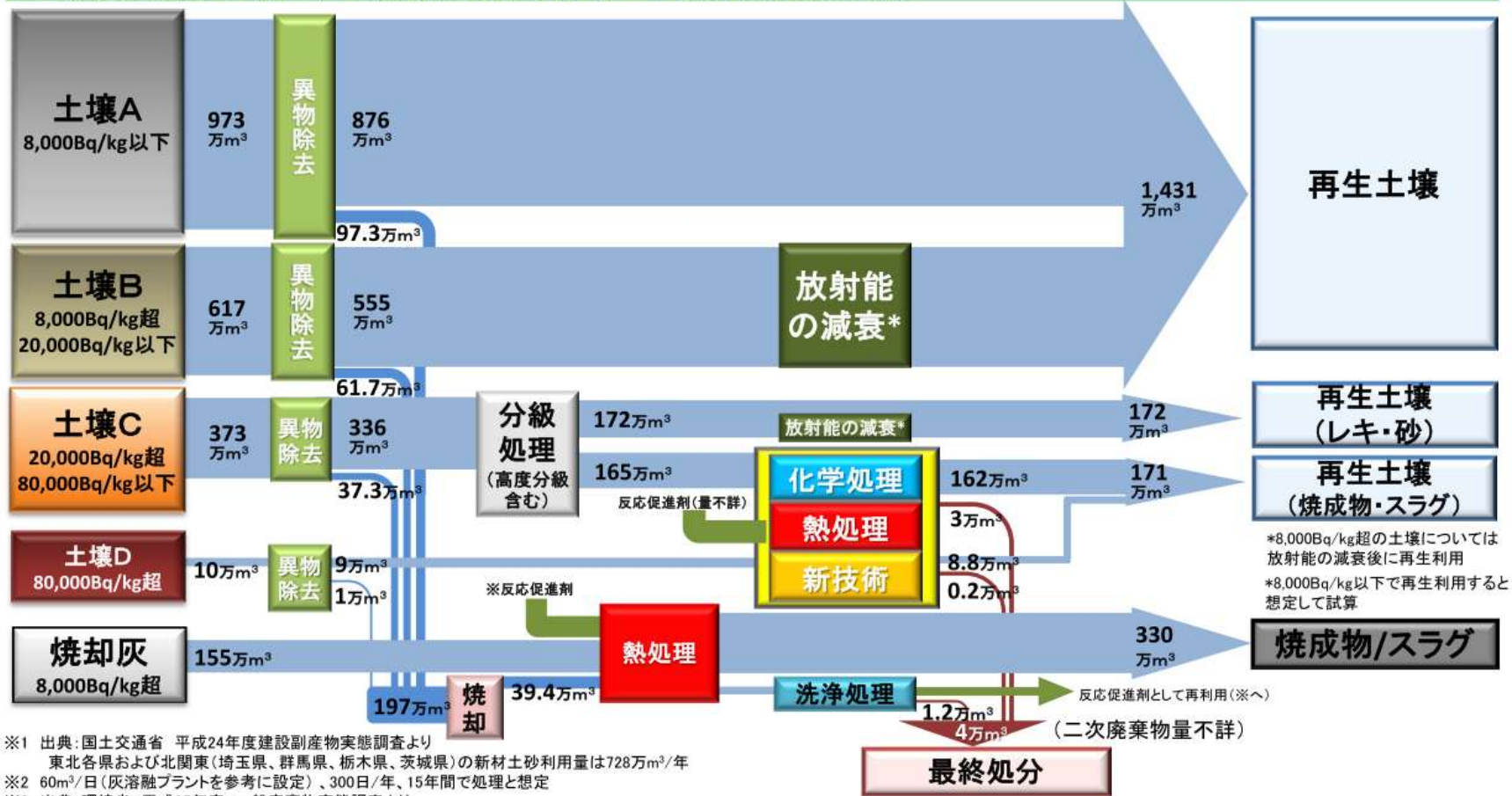
14～22%減

14～22%減

壮大なムダ「除染」⇒今度は「浄化物」として再利用

参考6-4-1) ケースⅣの物質収支の詳細 ～浄化物の放射能濃度を8,000Bq/kg以下とした場合～

- 再生資材(2,104万m³、うち異物除去した土壌1,431万m³、分級後のレキ・砂172万m³、高度処理からの浄化物171万m³、焼却灰の焼成物330万m³)は、東北・北関東地域の新材土砂利用実績^{※1}の2.89年分に相当。
- 焼却灰の処理プラント規模^{※2}は、日量300m³処理×7.2基を要する見込み。
- 最終処分量は4万m³(平均規模の最終処分場^{※3}の0.1箇所分に相当)。

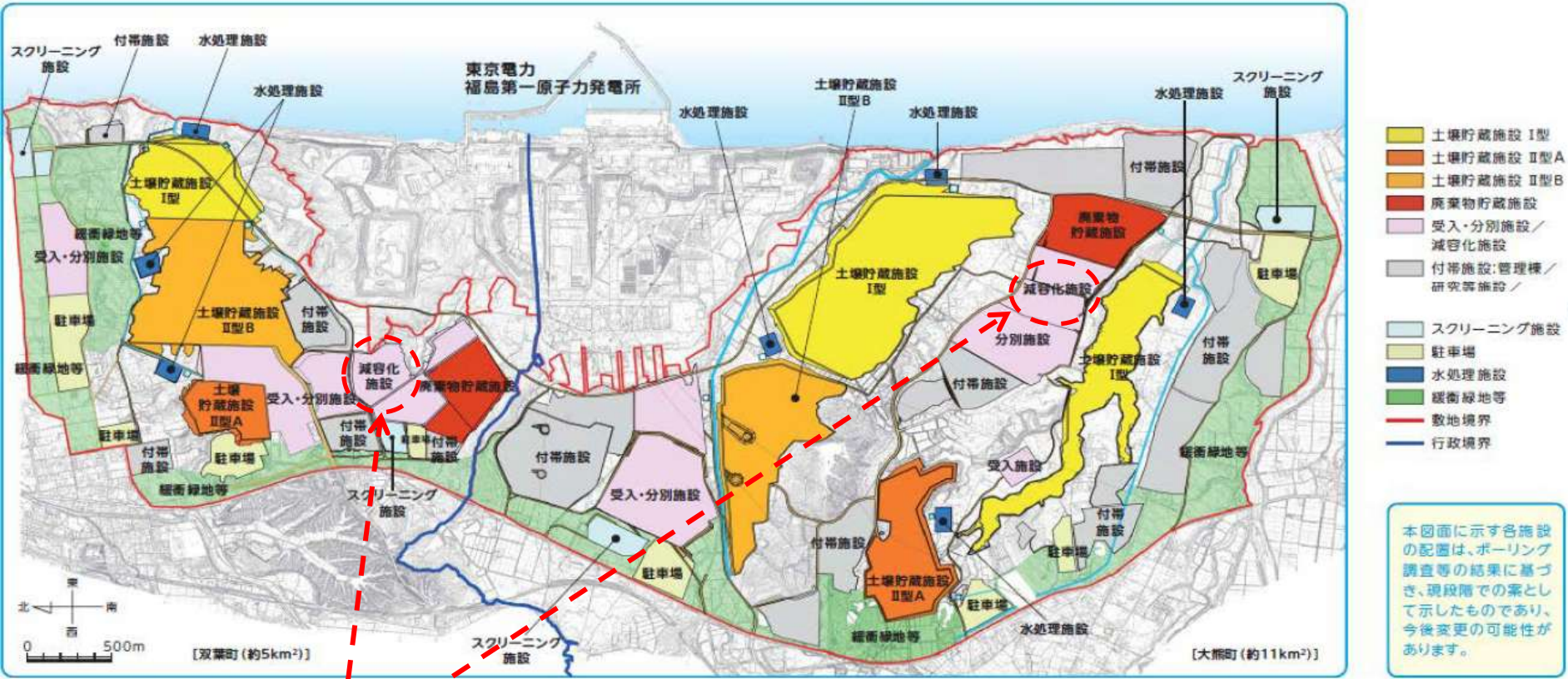


中間貯蔵施設は巨大な「浄化」施設＝放射能処理プラント

中間貯蔵施設の配置図

用地の取得状況や除染土壌等の発生状況に応じて、段階的に整備を進めます。

- <配置の基本的考え方(主な事項)>
- 施設は、貯蔵する土壌や廃棄物の放射性セシウム濃度、施設を配置する地盤の強度・高さなどを考慮して適切に配置します。
 - 谷地形や台地などの自然地形を最大限に活用して、土地改変をなるべく避けて施設を設けることにより、環境負荷の低減と工期の短縮を図ります。
 - 施設全体の機能性・効率性を勘案しつつ、各施設が一体的に機能するよう配置します。

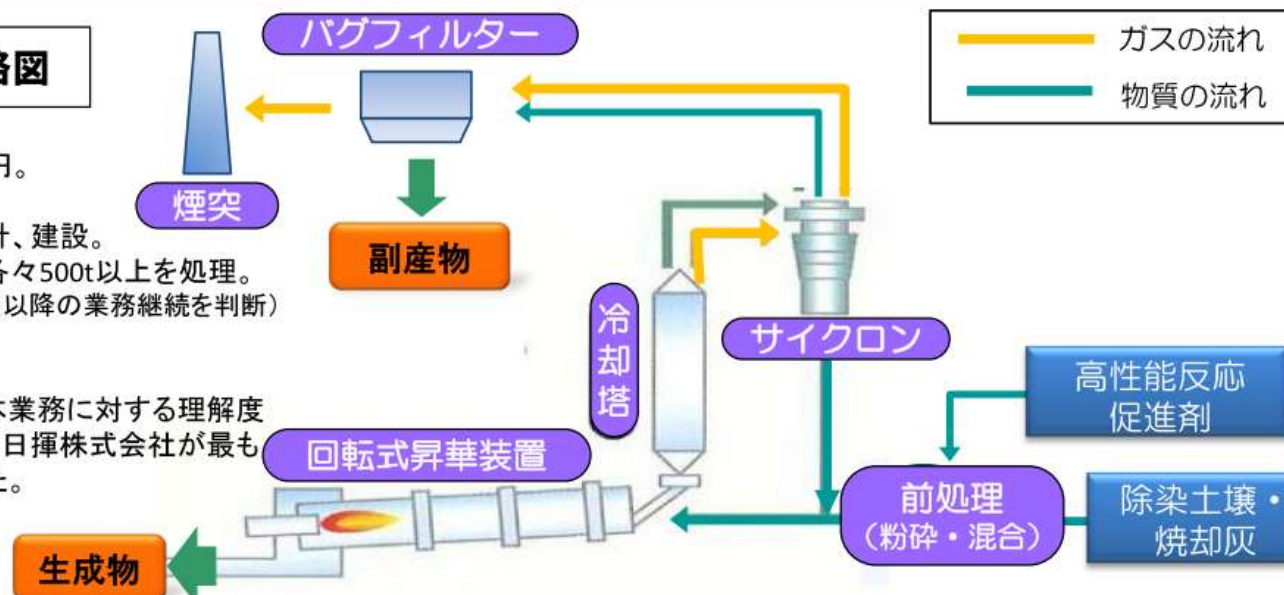


(参考)飯舘村蕨平地区における放射性物質の分離による焼却灰及び汚染土壌の資材化実証調査業務

飯舘村蕨平地区において、焼却灰及び汚染土壌に含まれる放射性物質を分離・濃縮し、再生利用可能なレベルまで放射能濃度が低減され工事資材として有効活用することが可能な生成物を得るための新技術を実証する調査業務。

施設の特徴	(1)放射性物質の除去 回転式昇華装置により、焼却灰、土壌等から放射性セシウムを気化、除去後、冷却・固体化、バグフィルターで捕集、回収 (2)生成物の工事資材としての活用 回転式昇華装置の転動に伴う造粒作用等により生成物は土木建設工事での活用に適した各種規格に適合した性状・品質・サイズに調整可能
公害防止放射線対策	・バグフィルターを直列に2基配置することで、排ガス中のセシウムをほぼ完全に除去 ・副産物は、遮蔽効果を有するコンクリート製容器に封入
業務の条件	・施設規模 : 10t／日程度の処理能力を有する仮設資材化施設とする。 ・処理量 : 現行業務(平成25～28年度)としては、焼却灰及び土壌を各々100t以上処理 : 全体計画としては、焼却灰及び土壌を各々500t以上処理

概略図



新たな放射能施設 = 焼却灰の減容化

減容技術の現状と課題について

焼却灰の減容技術（4/7）～熱処理～

- ・ 熱処理は、焼却灰(主灰・飛灰)を溶融あるいは焼成させ、セシウムを気化して分離する方法。
- ・ これにより放射性セシウムの濃度を低減させた溶融スラグ等を回収する。
- ・ 気化したセシウムは、冷却し固形物として回収する。

原理イメージ



- ### メリット
- ・ 除染率が高い。
 - ・ 安定した溶融スラグ等が得られる。

モデル・プラントは 東京・日の出町 エコセメント工場



詳しくは「たまあじさいの会」中西四七男さんから